



いづみ

No.74

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 44



《月の石》

山本 良鷹

(2 ページに「作者の言葉」)

自作自選 44

作者の言葉

さび色した、横に少し長い石。真っ白いチョークで線を引き、この塊を「月の石」と命名。石頭を振り上げ、ノミを打ち込む。長い、長い石音の単調なリズム、流れる汗、深い夏草の匂い。一服していると高いところでアカゲラの激しいドラミングが始まる。第87回道展出品作品。
(道展会員、札幌市在住)

タイトル：《月の石》

制作年：2012年

素材：六方石

サイズ：H280×W240×D950 cm

設置場所：PHOTO STUDIO RIKA

(千歳市)

宮の森の四季 44

本郷新記念札幌彫刻美術館

学芸員 岩崎 直人

宮の森・円山地区ならではの美術

今年、札幌彫刻美術館は開館40周年という記念すべき年を迎える。当館は、本郷新を顕彰することに主眼を置く一方で、宮の森に立地する美術館として、美術教育、生涯学習などの活動を通じてこの地区の文化創成に幾らかでも寄与してきた。その深度や密度をさらに高め行くことを50周年までに着々と、しかし、速度を上げて臨むべきことと考える。その一環として、ここ宮の森・円山地区に刻まれた美術文化の痕跡をきちんと見つめることから始めてみようと思いついた。

その初手としてここに居を構え活動していた美術家は誰かと思案する。本郷と同世代で函館生まれ、小樽育ちの国松登（1907-94）が思い浮かぶ。言わずと知れた彫刻美術館友の会の初代会長である。1958年に札幌に移住しており、この時暮らし始めたのが宮の森であった。後半期の代表作《氷上の人》シリーズのほとんどはこの地で描かれている。

また、東京で活動する本郷新を故郷札幌とつないだ立役者、本田明二（1919-89）が暮らしていたのは円山西町だ。月形町に生まれたが、復員後の1948年に当地に居を移し、そこから彫刻家としての歩みを始めている。

他に、画家夫妻の八木保次（1922-2012）・伸子（1925-2012）、版画家の大本靖（1926-2014）も円山西町で生活し、制作した。本誌の題字を手がける彫刻家の國松明日香氏（1947-）もここである。今は小樽朝里川の阿部典英氏（1939-）は札幌市と合併前の円山西町に生まれて6年間過ごし、1993年から20年間ほど宮の森に暮らした。

こうした作り手のみならず、受け手の側の、すなわちコレクターの調査も併せて行いたい。両側面からこの地固有の美術文化醸成の足跡を辿れたならと思う。



大通公園《希望》像女神はどこへ

彫刻美術館友の会会長 橋本 信夫

「彫刻の似合う街」と詩人・原子修がうたうサッポロには 800 点余りの彫刻が散在している。中でも大通公園とその周辺には見栄する作品が多く、西 1 丁目の南西角、「カナモトホール」(札幌市民ホール) 前広場に白コンクリート製の《希望》像が置かれている。この彫刻は市民ホールの前身、旧札幌市民会館の竣工記念として 1958 年に山内^{やまうちけお}壯夫によって制作された。

船首女神像(フィギュアヘッド)のような、舟形の台座の上に白色の衣をなびかせ、両手にハトを捧げた女性像は、市民会館の船出と平和のイメージを重ねたモニュメント像として広く市民に親しまれ、62 年間にわたって街の移り変わりを眺めてきた。

しかし、その女神像の周辺がやや騒がしくなりそうである。最近、市民ホールの改築や隣接する NHK 札幌放送局の移転、さらに市役所新庁舎の建設候補地として浮上するなどの話題を耳にするようになったからである。《希望》の像がこのままでいられるかどうか。

制作者、山内壯夫(1907~1975)は現在市内に《希望》のほか 28 体の作品を残しているが、コンクリート作品はいずれも半世紀以上にわたって自然環境下に放置され、

破損や鉄錆に加えてカビや鳥糞汚染が目立ち、パブリック・アートとしての美観を損ねている。しかも、《希望》像は表面の塗装や台座の補修などはなされたものの、未だ本格的な調査や修復は行われていない。移転問題と同時に像の修復も考えなければならぬ状況でもある。

一昨年、円山動物園前の山内作の白コンクリート作品《よいこつよいこ》(1952)が著しい経年劣化により破損したため道内の業者がこの修復を手掛け、見事に復元した。昨年は夕張市の炭鉱遺産である戦時中のコンクリート彫刻《採炭救国坑夫の像》(中村直人作)も同じ工法をもとにオリジナルの色調を保ったままで復元された。

これまでコンクリートは耐久性が弱く、長期保存に不適と思われてきた。しかし、最近の土木工学の進歩によって高価なブロンズ改鑄によらずとも、定期的な低費用の保守点検で原型のまま、コンクリート作品をほぼ恒久的に保存できる技術体系が確立されつつある。

札幌の起点に立つ《希望》像をこうした技術と共に明日への期待を込めた札幌市民の思いとして世代を超えて守り、伝えたいと願っている。

北海道の彫刻に何を見るか—本郷新を手がかりに

彫刻家 小田原のどか

「開拓」。その言葉が、日本の近代にとってどれほど重いものであるのか、まったくの部外者である私にも、その一端にふれたように思えた、そんな半年間でした。

昨年9月26日、本郷新記念札幌彫刻美術館（以下、彫刻美術館）主催の講演会が開かれました。これは「札幌国際芸術祭2020」にアーティストとして招聘され、展示会場の彫刻美術館を本郷新の作品調査のために訪れるなかで、「ぜひ講演を」と企画していただいたものになります。残念ながら札幌国際芸術祭は中止になり彫刻美術館での作品展示は実現しませんでした。招聘を契機に自宅のある東京から何度も北海道を訪ねたことは、何物にも代え難い経験になりました。

昨年の夏には札幌、旭川、網走、釧路、根室、帯広を鉄道で回り、先住民族の慰霊碑などを訪ね、列車に揺られながら「開拓の礎」という言葉の重さをかみしめる時間を過ごしました。この線路は、この道は、いったい誰の手によって拓かれ、築かれたものであるのか。そのようなことを考えたのは、初めてのことでした。

9月の講演の演題は「彫刻はなぜ破壊されるのか」としました。ブラック・ライブズ・マターという運動によって、米国では

歴史的人物の彫像の引き倒しが相次いで起こっています。ここでの破壊行為は日本ではネガティブに報道されがちですが、私はこれに大きな可能性を見出しています。

なぜなら、そもそも公共空間の彫刻は、議論を喚起し、社会との衝突を引き起こす存在であるからです。「新大陸発見の英雄」であったコロンブスが歴史観の更新とともに「先住民族虐殺者」へと変わり、その彫像が引き倒される時、当たり前ですがコロンブスは変わりません。われわれが変わるのです。自分たちの似姿を、自分たちの手で壊し続けているのが人の歴史ではないか。そんなふうに、私は考えています。そして、そうであるとすれば、彫刻の破壊とは嘆き悲しむことでも、忌避することでもなく、「われわれはこれほど変わった」ということの証しであるはずで

さて、日本における彫刻の破壊は、本郷新を抜きに語ることはできません。1969年、《わだつみ像》の破壊（京都・立命館大学）、1972年、《風雪の群像》の破壊（旭川・常磐公園）。戦時には他の彫刻家たちと一線を画す平和思想を紡いでいた本郷の彫刻が、なぜこれほど破壊の対象とされるのか。これについては2021年2月7日発売の『群像』（講談社）という文芸誌に評論を寄稿しま

すので、ぜひとも読んでいただけたらと思います。

「北海道デジタル彫刻美術館」いよいよスタート

彫刻美術館友の会会長 橋本 信夫

長い間の念願であった当会の「北海道デジタル彫刻美術館」の制作が終わり、2021年1月中に友の会ホームページで公開される。まずはこの見出しを山内壮夫作の《希望》像で飾り、インターネット社会への門出を祝いたいと思っている。

道内には開拓の歴史を刻む様々なモニュメント彫刻が各地に多数設置されている。いずれも長い間風雨にさらされながら変化に富んだ自然を背景にパブリックアートとしての存在感を示し、美術館収蔵の作品とは大きく趣をことにしている。

しかし、残念ながらこれまで北海道には野外彫刻に関するまとまった資料がどこにもなく、その全貌を捉えるのは極めて困難であった。

こうしたことから1985年頃、会員の故仲野三郎夫妻が道内各地の野外彫刻の調査を志し、ほぼ20年を費やして約2,400作品の基礎資料（作家、制作年、素材、構造、設置場所、保全状態や写真（約10,000枚））を収集した。この後、彫刻資料収集努力が会員に引き継がれ、現在の収録数は3,000余点に達している。

そこで当会では2006年からこの手書き資料を会員が分担してパソコンに入力し、野外彫刻のデータベース化と作品検索システムの構築が図られた。さらに、市内各地の野外彫刻を「屋根のない美術館のコレクション」と見立て、これらの彫刻情報が集約された地図コンテンツをデジタル彫刻美術館と名付けてWEBによる公開と活用を検討することとした。

幸い2008年に測量専門家の協力を得て、航空写真による札幌彫刻地図コンテンツの

基本設計がなされ、続いて10年から会員の手で国土院地図、ついで12年からはグーグルマップスによる「街なかの美術館」がWEBで公開され、現在に至っている。

今回は北海道情報大学の二人の学生、塩畑陽平君と日下部明佳君の協力のもと、「街なかの美術館」をモデルにワードプレスとグーグル機能による「北海道彫刻地図コンテンツ」が設計された。ここでは全道各地の彫刻情報を地域別、市町村別に検索でき、それぞれの郷土の貴重なモニュメント彫刻の詳細をどこからでも簡単に求めることができる。

これによって「デジタル彫刻美術館」は単なる野外彫刻の手引としてばかりでなく、各地の彫刻家情報、展覧会ニュース、美術教育、観光や耐久文化財の管理・保全などにも広く役立つものと思われる。さらに美術館のない市町村でも、野外彫刻、記念碑、由緒ある建築物、屋外の耐久文化財など、“site specific”（場所固有）な構造物の情報を収集、整理し、さらに各地区のボランティア市民と連携して情報を共有することによって地域を広くカバーする魅力的な「デジタル美術館」を運営することもできる。いずれ近い将来これらの資料が様々な外国語に翻訳され、全世界からの検索対象となるような時代を迎えることになる。

35年にわたる草の根市民のささやかな努力の成果、我らの希望の「北海道デジタル彫刻美術館」がインターネットを介して全国、全世界に喧伝され、国境のない世界の大波にもまれながら既存の美術館に伍して逞しく成長する姿を道民挙げて見守って頂きたいものである。

《採炭救国坑夫の像》修復完了

高橋大作副会長が協力

夕張・石炭の歴史村

夕張市の「石炭の歴史村」にある《採炭救国坑夫の像》の応急的な修復工事が昨年10月完了した。

工事には友の会の高橋大作副会長が計画段階から携わり数々の助言をして支援した。



この像は戦時下の1944年(昭和19年)、石炭増産奨励を目的に制作されたが、コンクリート製で制作以来70年余りたち、劣化が激しく、ひび割れなどから像の各所が崩れ落ちる状態だった。

修復工事は表面のカビやコケを紙やすりで削り、ひび割れ

を補修、表面に保護材を塗って修復した。

作業に加わった高橋さんは「像の劣化を防ぎ、長期保全を目的にセメントの素地の上に表面を保護する塗料を使ったので厳冬の夕張でも耐えられるのでは」と話している。

彫像のモデルと言われる当時の夕張鉱業所長・竹鶴可文(NHK朝ドラ「マッサン」の実兄)の目鼻立ちもくっきりした。

JR北海道車内誌

「野外彫刻と話そう」を特集
友の会の活動も紹介

JR北海道の車内誌「The JR Hokkaido」(昨年11月発行)が「野外彫刻と話そう—北海道・街と大地のモニュメント」の特集を組み、札幌、函館、旭川、釧路の代表的な彫刻を紹介しながら、彫刻にまつわる各地の話題を掲載した。



この中で友の会も橋本会長のコメントをはじめ、彫刻清掃活動の様子や《よいこつよいこ》像の修復作業など、彫刻とのかかわりが写真を添えながら掲載されている。

記事は友の会のホームページで読むことができる。

2020年度最後の彫刻清掃
《わだつみ》像など6体
彫刻美術館前庭で

2020年度最後の彫刻清掃が昨年11月1日、本郷新記念札幌彫刻美術館で行われた。

この日は彫刻家の唐牛幸史



さんとインターンシップ参加の高校生、会員など15人で美術館前庭の《わだつみ像》や横たわるトルソーなど6体の彫刻を洗剤を使って水洗いした。

このあと、18年に倒れたコンクリート彫刻《鳥の碑》がブロンズ像に生まれ変わった経緯を寺嶋弘道館長から聞いたあと「本郷新・全部展」を同館長と山田学芸員の解説で鑑賞した。

今年度の彫刻清掃はコロナ禍の影響で例年より少なく、4

回にとどまった。

事務局日誌

▼2020年9月28日＝会報73号発送(エルプラザ)▼10月2日＝黒田清隆生誕180周年記念パネル展に会員募集ポスター展示(札幌・時計台)▼8日＝定例役員会(エルプラザ)「ケア」12月号掲載企画ほか▼20日＝夕張・採炭救国坑夫像の修復作業終了。高橋大作副会長出席▼11月1日＝彫刻清掃(彫刻美術館)わだつみ像など6体▼JR 北海道車内誌が彫刻特集(友の会の活動も掲載)▼6日＝石川さわ子札幌市議懇談▼12日＝役員会(エルプラザ)会報74号編集企画、彫刻美術館講演会での山内壮夫の呼称問題など▼12月10日＝役員会(エルプラザ)

編集後記▼新型コロナウイルス感染の恐怖にうろたえながらの2020年でした。会の活動も大幅に制限される中、何とか休刊せず会報を発行できました。原稿を寄せて下さった方々のおかげです。ありがとうございました▼さて、新しい年を迎えました。何とかコロナ収束を実現させ、従来通りの活動を取り戻したいところです。今年もよろしく願います。(大内)

彫刻美術館友の会

会報「いづみ」 No.74

2021年1月1日発行

発行人 橋本 信夫

編集者 大内 和

(札幌市清田区清田5-4-6-30

011-884-6025)

印刷 山藤三陽印刷

会報「いづみ」74号 目次

自作自選44 《月の石》 山本 良鷹	表紙
作者の言葉	2
宮の森の四季44「宮の森・円山地区での美術」岩崎直人	2
風見鶏「《希望》像女神はどこへ」 橋本信夫	3
寄稿「北海道の彫刻に何を見るか」 小田原のどか	4
レポート「北海道デジタル彫刻美術館」 橋本信夫	5
友の会ニュース	6-7
夕張・採炭救国坑夫像修復/JR車内誌彫刻特集/彫刻清掃/HP閲覧10万件	
つばやきコーナー	7
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか	8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本 館

■札幌ミュージアム・アート・フェア2020-21

～2月14

日

コロナ禍で発表の機会を失った美術家などに対する支援、アートマーケットの活性化を目的に札幌を中心にしたギャラリーが取り扱う美術家の作品を展示販売する。

記念館

■没後40年記念展

本郷新・全部展②

～4月22日

若かりし頃のブロンズ彫刻を中心に本郷芸術の揺籃期に焦点を当て、ロダンや高村光太郎からの影響下での制作から独自の作風を確立するまでをたどる。

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中

です！ご覧ください

<https://sappor>

[o-chokoku.jp](https://sapporo-chokoku.jp)

友の会 HP

総閲覧数 10 万件突破

友の会のホームページへの閲覧者数が昨年末に 10 万件を超え、会の情報発信の有力な武器となった。

ホームページは会報「いずみ」創刊時（2002 年）に開設されたが、閲覧記録が残るのは 2008 年以降。

昨年末現在で総訪問者は 62567 人を数え、毎月平均 2 千から 4 千人が HP を見ている勘定。最近では東京から「彫刻清掃に参加したいがコロナ禍で行きそびれている」のメッセージや入会申し込み、会への問い合わせが増加している。HP の運営を担当している細川房子さんは「情報を共有して広くつながりを求め、若い人たちとの交流を深めたい」と話している。

友の会 HP アドレス

<https://sapporo-chokoku.jp>2021 年の友の会新年会
コロナ禍で中止

恒例の 2021 年友の会の新年会は新型コロナ

感染の拡大を見逃しがつがないため中止することに決まった。

新しい年への願い

「新年の希望」に何故かフランクフル「夜と霧」のアウトシュビッツが浮かんだ。生き残ったのは希望を捨てなかった人だという。今、コロナ禍の様々な出来事を思うと、人は例えばぼんやりとした希望にだって救われるに違いないという気がしてきた。札幌市民ホール前の《希望》像。作者の山内さんはどんな思いで制作したのかしらん。 原田 照子

「新年を迎えて」と言われると、後期高齢者ですので、やはり「健康維持」がメインになります。コロナ禍の深刻な事態の中、医療機関への施策支援を実施し、ワクチン開発を望みます。老人の「閉じこもり」生活でも終活に励み、出会った先輩への感謝と教訓を忘れず、感染に気を付けたいと思います。

小林美保子

医療雑誌「ケア」に連載中の「野外彫刻マップ」のお手伝いをしながら道内各地の彫刻の写真や解説を読むと心が落ち着きません。知らない彫刻がいっぱいあります。地域の文化と歴史を物語る深みや味がある多くの彫刻。今年はこれらの彫刻に出合いに行きたいです！

斉藤ミサヲ

彫刻家・田嶋碩朗は戦時下の金属供出という不遇に遭い、銅像を破壊されてしまい、現存する作品は多くはありません。祖母、山崎貞子（碩朗四女）が「彫刻家 田嶋碩朗」を出版して以来、作品が全国各地に点在していることが判明。昨年、一般財団法人田嶋碩朗彫刻美術財団が設立され、今年は作品や記録を掘り出し、リーフレットを出す予定です。

村上 彩子